

甲南大学文学部 人間科学科

いのち

# 命に触れた2週間

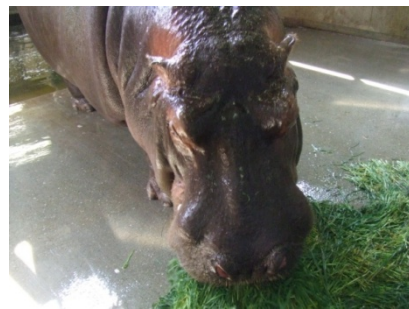
2008 年度博物館学芸員 実習記録(神戸市立王子動物園)

甲南大学文学部 人間科学科 4年次 山縣 亜梨沙

2008/10/01

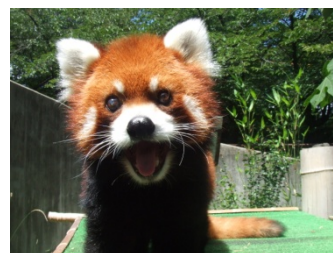
王子動物園での学芸員実習は私の人生の中で最も貴重な経験で、この先どんなに長く生きてたとしても経験できないであろう。この経験を通して私は動物の温かさに触れ、「命」の温かさを学んだ。前半に行われた飼育実習では、「1 班(草食動物、コアラ等)」の班での実習だった。私が実習をした班では飼育員の方々が動物に触れられる機会を多く作ってくださり、また他の班に比べて触れることのできる動物が多かった。自分自身の手で動物に触れることで、体温や皮膚のさわり心地、また鼓動を感じた。

私が触れた動物の中で最も印象的だったのはカバだ。ほとんど動きがなく水の中にいるカバを、これまでこんなにじっくり見たことがあったであろうか。カバについての知識もなければ、特別な興味があったわけでもなかった。しかしカバ舎の清掃のために中に入ると初めて間近でみるカバの大きさに、仕切り越しではあったものの、かなり圧倒された。私が見た大きなカバはオスの出目男。最初は陸にいた出目男が初めて見る私を警戒して水の中に入り出てこなくなった。ホースで隣のナミコの部屋を掃除している間も、出目男は時折顔を出してこちらを見るものの、決して陸には上がってこなかった。飼育員の方に、水に潜る出目男に水をかけてみるよう言われたので水をかけると大きな口を開けて水面に上がってきた。すると警戒の気持ちが解けたのか、出目男は私がいる前で陸に上がりエサを食べ始めた。触れても大丈夫だと飼育員の方がおっしゃったので、緊張しながらもわくわくする気持ちで触れた。出目男の皮膚はとてもヌルヌルしていた。カバは皮膚が弱く、日光などから皮膚を守るために粘液を分泌しているのだと教えていただいた。粘液は赤く、「血の汗」と呼ばれている理由をこの時に知った。進化の過程で皮膚が強くなるのではなく、粘液を分泌するようになったということがとても興味深いことであった。



私が触れたのはカバだけではない。私が感動したのは、赤ちゃんカンガルーのモモコを抱いた時のことだ。カンガルーの部屋を掃除するとき、カンガルーは神経質でとても敏感だという話を聞いた。実際、掃除をしようとカンガルーの部屋に入ると、たくさんのカンガルーが私をじっと見ていた。とても警戒していたので、なるべくゆっくり動き、近づかないようにした。モモコの場合、お母さんの袋から出てすぐにお母さんが死んでしまい、飼育員さんに育てられている。そのため人に慣れていて、カンガルーではあるが抱くことができた。エサは飼育員さんが作ったミルクで、抱いた状態でミルクを飲ませる。私は飼育員さんがミルクを飲ませるときに抱かせていただいた。カンガルーといえば連想されるであろうしっぽは、小さい体からは想像できない力強さと太さと長さをもったものだった。ミルクを飲むのを嫌がった時に危険になるしっぽと手を優しく押さえて抱いた。モモコはとてもあたたかく、手には心臓の動き、「鼓動」を感じた。当たり前なのだが、そのとき私は改めて「生きているのだ」と感じた。あの時のあたたかさや手に伝わる鼓動は、忘れることができない「命」を感じた瞬間だった。

動物によって手に触れたときの感触は全然違い、そのたびに驚いたり感動したりした。今回の実習で私は、たくさんの動物の命に触れることができたように思う。今回の実習で私は、人や動植物などあらゆるものに触れるときに忘れてはならない「優しさ」を再認識できたように思う。



学芸員実習では飼育実習の他にサマースクールや資料館での展示・動物ミニガイドを経験した。サマースクールは低学年と高学年を分けて行った。低学年の子供たちの印象はとても元気で、飼育員の方の話や私自身の言葉を聞いてもらうように集中させるのが大変だった。高学年の子供たちはとても大人しく、低学年の子供たちとは違い、どうやって盛り上げるか、子供たちにわくわく感を与えるかが重要だった。

低学年の子供たちは「チンパンジーのエサ隠し」「キリンのエサやり」「円形猛獣舎の見学(1日目は猛獣舎が工事のため「ゾウのトレーニング見学」)」「調理場の見学」を行った。「チンパンジーのエサ隠し」とは、まさしく「エサを隠す」というもので、子供たちがチンパンジーの運動場の中に入り果物などをいろんなところに隠すというものだ。そして隠した場所を覚えておき、チンパンジーが子供たちの隠したエサを見つけられるかどうか試す「知恵比べ」だ。チンパンジーたちはとても簡単にエサを見つけていき、私もエサを隠したがいとも簡単に見つけられてしまった。チンパンジーの頭の良さを思い知らされた。「キリンのエサやり」では子供たちがカシの木の枝を手に持ち直接エサをやるというものだ。キリンの舌はとても長く、枝を手に持って差し出すと長い舌を使ってくると枝を口に運んで食べていた。動物によって食べ方が違い、次の「ゾウのトレーニング見学」ではゾウにエサをやることができた。

ゾウの場合は長い鼻を使って口にエサを運ぶ。動物によって食べ方に違いがあることを学んだ。



高学年の子供たちはまず開校式の後に嶋谷飼育展示係長による講義を受けた。講義の内容は「消化」に関する内容で体のしくみの違いなどを勉強した。人は雑食で野菜もお肉も魚もいろんなものを食べるのに、草食動物であるゾウやキリンやカバやサイは草しか食べていないのに私たち人間より体も大きく体重も重い。とても不思議なことであるように思うが草食動物は草から栄養を吸収し消化するために長くて大きな胃腸を持っていることにとっても驚いた。その後のスケジュールは「コアラ舎の掃除」「調理場でエサ作り」「紙すき」だった。子供たちと一緒にコアラ舎の中に入っていくと、子供たちはじっとコアラを見つめていた。初めてガラスなどの仕切りがないところで間近に見るコアラをじっくりと観察しているようだった。コアラ舎では紙すきに使うフンを手で拾い、ほうきで掃き掃除をした。手でフンを拾うことに最初は抵抗があった子供たちも、私たち実習生が先に拾って見せると一緒に拾ってくれた。口で拾うことを指示

するだけではなく、まず実際に拾うところを見せることが大切なのだ。調理場でのエサ作りは包丁を使って食材を細かく切っていく。走鳥類のエサは普段家庭で使っているような包丁を使用するのだが、カバのエサはスイカを切る用の大きなナタのような包丁を使用する。一つの調理台に子供たちが向かい合い、隣り合い作業をするのでなるべく危険のない間隔をあけるように注意を払った。エサ作りの後はトラックの荷台に乗り込んで、今作ったエサを食べる動物を見に行った。作りっぱなしではなく、実際に飼育員さんと動物を見に行く機会があるのはいろんな話が聞けてよいと思う。

その後は紙すきをした。この紙すきは、王子動物園にいるゾウ、キリン、パンダ、コアラのフンを使って行う。フンは実習生が洗浄・消毒をしていたので清潔な状態ですぐに紙すきができる準備をしていたが、子供たちもフンを洗う経験はしてほしいということで、嫌がりながらも水の入ったバケツを使って洗った。私は準備の時にパンダとコアラのフンを使って紙すきの練習をした。パンダはタケの良い香りがして、コアラはユーカリの葉の香りがする。香りも楽しめる紙をつくれたことに感動した。単純な作業ではあるが子供たちはとても喜んでいて、経験などの心に残る思い出も素敵だが、できた紙を持って帰るといつまでも残るので、いつまでも思い出せるだろう。



実習期間中にはホッキョクグマのドボンも見ることができた。これはホッキョクグマのプールの上から飼育員さんがエサを投げ入れ、飛び込ませるというパフォーマンスである。お客さんはガラス越しではあるが、グッと近づく距離に喜びの声を上げていた。一度プールに飛び込む

となかなか陸に上がらないので、陸にもエサを投げて陸に上げる飼育員さんの裏話を聞かせていただいた。



動物ミニガイドは時間がない中で、展示品と発表原稿を作った。テーマは「絶滅しそう動物」についてである。私たち実習生は二つのグループに分かれて発表することになった。去年までは展示品の作成をしていなかったそうなので、前例のない中でどのような作品を作ればいいのか戸惑いながら、限られた時間の中で両グループが必死になって展示品を作成した。私のグループはパンダについて調べた。パンダは時が経つにつれて減少している。原因は毛皮などを狙われ密漁されてしまうこと、タケが開花して枯れていき食糧がなくなってしまうこと、森林伐採である。パンダだけではなく、他にも絶滅がささやかれている動物がいるが、その原因は人間の影響が大きい。私たち自身が考えるべき事がたくさんあるが、発表原稿を作る際、どのように訴えかけるべきなのかも悩んだ。今回の発表は小学校低学年の子供たちを対象に原稿を作った。どこまでかみ砕いた言葉で話せばいいのかを考えるとところからスタートになる。どのような言葉を使って説明するかは、自分自身がどれだけその言葉の意味を理解しているかに関わる。誰かに何かを伝える時には伝える相手によって使い分けること、そのためにはまず自分自身が理解しなければならないということも学んだ。また、どんなにわかりやすい言葉を使って話していても、こちらから一方的に話すだけでは退屈になってしまったり、集中力がきれてしまったりで最後まで聞いてもらえないかもしれない。そこで子供たちに質問を投げかけてみたり、クイズをして手を挙げてもらったり、着ぐるみを着たりと工夫をした。発表当日はクイズにも積極



的に答えてくれたり最後まで話を聞いてくれたり、保護者の方もうなずいてくださりなんとか成功したように思う。

実習最後は2日間の絵画教室を行った。前回のサマースクールは毎日違う子供たちが来たのだが、絵画教室には2日間通して1年生から6年生まで幅広い年齢の子供たちが参加した。私は1,2年生の班についた。私たちの班は「ジャイアントパンダ」を描くことになっていた。まずは実物を見ずに、間違ってもいいので思い出しながら書いていく。戸惑っている子には、耳はどんなかたちだったか、何色だったか、しっぽはどんなものかなど質問をしながら描けるように導いたりもした。外に出て実物を見ながら描く際は、子供たちがはぐれないように注意をした。自分の描いた絵を発表する機会があったのだが、子供たちは大勢の人の前で緊張しながらも一生懸命発表していた。その後、石ころで動物を作った。石の形を見て、目や鼻をつけて動物を作るのだが、石の上にお絵かきをする子供たちが多く、説明するのが難しかった。石ころ動物を作った後は、「動物と人とのつながり」をみんなで輪になって表現した。特に低学年の子供たちに「生態系」という言葉の意味、そして地球に生きる上で生態系がどれだけ大切なのか理解してもらうことは難しい。しかし、みんなで手をつなぎ輪になることで、地球上にあるものはすべてが相互に関係していてつながっているというイメージを持ってもらえたのではないかなと思う。そのときに理解できなくとも、いつかこの日の事を思い出して理解してほしいと思う。伝えることの難しさ、それでも伝えなくてはならないことの大切さを学んだ。

今回の実習ではたくさんの人に出会い、たくさんを経験した。お客さんとして来演したときにはできない経験をたくさんさせていただいた。学芸員としての勉強だけでなく、人生の中で一生の宝になる経験ができた。本当にありがとうございました。

